

## 2018年度 博士学位論文審査資料

No. 1

提出期限：2018年12月10日（月）12：00厳守

日本語文化専攻	氏名	松本滋恵	学生番号	G16221
論文題目	栗原貞子論一反戦・反核・平和を掲げ行動する詩人として一			
要旨	(2000字) <u>学生が記入</u> (ワープロで清書してください。)			
<p>栗原貞子は、行動する詩人として知られている。貞子はどのようにして詩人であることと平和運動とを両立させることができたのか。また、詩人としての営為において彼女の社会性、思想性はどのように開示されていったのか。管見によれば、従来の研究においては、この点について詳細に論証したものは見当たらない。それゆえ、本稿においては、詩を解釈すると同時に貞子が何を言わんとしているのか、そこに隠された社会性、思想性を明確化することを目的として考察を行なった。</p> <p>第一章では、1946年アメリカの占領下において出版された詩歌集『黒い卵』が、1983年に完全版として復刊されるまでのその経緯を明らかにした。また、詩歌集『黒い卵』の意義について見据えつつ、特に詩「黒い卵」からは、権力に屈しない個性があり、自らどう生きるかの問いかけと、政治に翻弄されない自己決定があることを指摘した。抑圧と圧制の辛苦の中で、「未来」を模索し、強靱な思想としなやかな表現が生みだされた詩であると結論付けた。更に貞子は、アナキストと評されることが多いが、本稿ではアナキズムの信条である「全ての権力を否定」することと、「自由発意、自由合意」の姿勢を根底に据えつつも、それに加えて、切実な愛への希求があることを詩歌集から読み解いた。</p> <p>第二章では、自らの被爆体験を基に、原爆を直叙的に詠んだ作品「生ましめんかな」を中心に、「原爆で死んだ幸子さん」と「私は広島を証言する」の考察を行なった。貞子は「生ましめんかな」、「原爆で死んだ幸子さん」、「私は広島を証言する」の3作品は、原爆詩人としての原点であると述べており、更に「「生ましめんかな」、「原爆で死んだ幸子さん」はともに実在の「明暗両面」のものである」と言及していることから、これら3作品について「明暗両面」の観点から分析を行なった。「生ましめんかな」においては暗い地下室、しかも夜という「暗」としか表現できない状況から「赤子の誕生」は将来に向けての限りない希望である「明」が提示されていると指摘した。「原爆で死んだ幸子さん」においては戦争、原爆の惨状、悲惨な幸子さんの遺体は、「暗」としか言いようがないが、母が遺体に真新しい花模様の白い浴衣を着せ、遺体を抱いたまま泣き崩れた行為に母の愛が「明」となっていることを述べた。また、「私は広島を証言する」においても、「ゲンバクのゲの字」すら口外できない検閲の状況は「暗」であるが、そのような状況の中で広島を証言者として自己を宣言したことは「明」とであると結論付けた。</p> <p>第三章では、詩「ヒロシマというとき」の直接的な詩作契機や『ヒロシマという</p>				

とき』の「序詞」の意味について明らかにした上で、詩句に時代背景という尺度を据えることによって注釈を加え、詩の解釈を行なった。この詩から貞子は、15年戦争の恥部を多層的、輻輳的に捉え、この戦争において自らの立場は「被害」でもあるが「加害」でもあるという実態を見据え、自己の人間性をそのような現実にも率直に対峙させることによって、糾弾と謝罪を投げかけ共感を求めた詩であると結論付けた。

第四章では、貞子が「孤立と傷心」に陥った出来事について触れ、そこからの脱却の契機を明らかにした。孤立からの脱却後、被爆朝鮮人の存在を知り、差別を意識することによって部落解放同盟全国婦人集会のために詩「未来はここから始まる」詠んだ。それ故「未来」は差別と核廃絶であるとし、「ここ」においては差別に対峙し、立ち上がり、糾弾する時と捉えた。詩「未来の入り口」の「未来」は「原爆慰霊碑」あり、「ここ」も「原爆慰霊碑」であるとした。更に、『詩集 未来はここから始まる』の扉には「一度目はあやまちでも／二度目は裏切りだ／死者たちを忘れまい」が記載されていることに注目し、このフレーズが後の貞子の詩に幾度も繰り返されていることから、これは原爆で生き残った者の責務として、二度と戦争へと突き進まないための戒めであり、必然性をもった絶対的真理として提示されているものであると結論付けた。

第五章では、貞子は行動する詩人と言われており、詩人と運動は貞子にとって車の両輪であることを資料に基づきながら整理を行なった。運動家としては、初期の平和運動から朝鮮戦争、自衛隊の増強、ベトナム戦争、日米安保条約の強化、自衛隊の海外派遣へと事態の進展に鋭く対応し、先制的に批判を展開したことを確認した。「反戦・反核・平和」のため、平和運動、原水爆禁止運動と関わり、集会、デモ、署名活動、座り込みに積極的に参加し、身を持って抗議をした。乞われれば、ありとあらゆる所に講演に行き、ついには体調を崩してしまうほどであった。「傍観者」としてではなく、抗議の渦中へ精神だけでなく肉体までも投じたその運動家としての姿勢は、詩人としての作風にも結びついていることを明らかにした。

以上のことをまとめると、本稿では栗原貞子論として貞子の「反戦・反核・平和」への姿勢を論じてきた。即ち、戦争への問題意識を原動力とすることによって、詩人の感性と批評家の理性を兼ね備えた貞子のその有り様を明らかにしてきた。このことは、核兵器の破壊力を体験した貞子が、広島証言者として自己を宣言し、後の世代に戦争の実相を伝え得る事を使命としたその道程を明らかにする試みであったとも言えることができる。